

モンテスマ王がチャプルテペクに彼の石像を作った石工たちに与えた豪華な褒賞、および、矮人とせむしたちがいる彼の王宮で起こった事々、そして王が抱いた深い悲哀について。

105 章 モンテスマはチャプルテペクに石工たちを連れて戻った。ふたたび自分の石像を目にすると、涙を押さえることができなかった。そして、石工たちに言った。「我が父たちよ、祖父たちよ、この像の中にしっかりと閉じられた小空間を作り、そこに私たちの古くからの記憶を伝えるいくつかのものを収めてもらいたい。この像は東を向いているのだから。」石工たちは言った。「王よ、出来るかぎりのことはいたしましょう。」こうして王は、石工たち、および悲嘆に暮れていたメシコの重臣たちとともに、メシコに戻っていった。そして帰着すると、ペトラカルカトル（^{マヨルドモ}重臣）を呼び寄せて言った。「グアシュテカ〔ワステカ〕から運ばれてきた貢納品である4ブラサと10ブラサの上質な布を、石工たちに与えよ。また彼らの一人一人に2袋のカカオを与えよ。」さらに王は言った。「トゥチパン¹の^{マヨルドモ}重臣をここに呼べ。」「お前たちが預かっている捕虜奴隷たちと、ツイウコアク人の^{マヨルドモ}重臣が預かっている捕虜奴隷たちを、ここに連れて参れ。」奴隷たちが連れて来られ、石工と職人たちが呼び集められると、モンテスマは言った。「ここにあるのは、お前たちの仕事に対する報酬である。」そしてモンテスマは、木材と畑のトゥモロコシを持ってくるよう奴隷たちに言った。さらに一人一人に、何包みかの布と、30日の仕事に対して与えられる以上のカカオの袋を与えた。そして「彼らを存分にもてなし、十分な衣服を与えよ」と命じた。さらに一人一人に、一袋のカボチャの種、一束のチレ〔トゥガラシ〕、6つの白い壺と、白い塩を与えた。そして言った。「安心して、家に戻り、休むがよい。」14人の石工たちは、過去のどの王にも増して勇猛なこの王の、その偉大さと寛大さを目にして、涙を流しはじめた。王は寛大さと慈悲深さを備える一方で、敵に対しては容赦なかった。彼やその国に対して背く者を見つけたときにはなおさらであり、その人物はすぐに死を迎えることになるのだった。モンテスマはどの王よりも法を重んじ、つまらぬ嘘をついていることを見抜かれた者は、テルポチカルコの学校の若者たちに引きずり回され、半死半生で放り捨てられた。盗みを犯した者は砂を詰めた葦で打たれ、カヌーに乘せられて、頭や体に傷を負うほどにたくさんの矢を遠くから投げつけられた。姦淫が発覚した者は、石を投げつけら

¹ 現在のベラクルス州トウспан。

れた。そのほか、貴族が同様のことを犯した場合には、平民に対するより重い罰が与えられた。モンテスマは毎週、チャプルテペクにある自分の石像を見に行ったので、石工と職人たちは立派な見晴台を作った。モンテスマは悲しみにくれ涙を流し、物想いにふけていたが、死ぬほどのことにはなるまいと思いなおして、矮人とせむしたちに向かって言った。「さあ、息子たちよ、あちらへ行くぞ。」彼らは答えて言った。「王よ、あなたが望まれるままに。私たちは、あなたと共に参ります。」王は答えた。「よかろう、我らが行くべきところを探そう。」数日後、モンテスマ王が王宮の上から四方を眺めていたところ、テスクコ〔テスココ〕の方に白い雲が天に昇っているのを目にした。これが意味するのは、以下のようなことであった。あるインディオがケツアルテペトルの丘で畑を耕していると、立派な鷲²が飛んできた。インディオは何が何だか分からぬうちに頭をつかまれて、高い山の上へと連れ去られてしまった。インディオはこの世のものとは思えぬような豪華な部屋に、突如として放りこまれた。すると鷲の姿はなく、そこには立派な人物の姿があった。その人物は言った。「ここに来い、恐れることはない。この花と香炉を手にとって、楽にするがよい。さて、これを見よ、ここにすっかり酩酊して我を失ったモンテスマがひっくり返っておる。その太ももに傷をつけてみよ。よいか、もう一度言うぞ、太ももに傷をつけるのだ。ぐずぐずするな、大丈夫だ、やるのだ。奴は正気をなくしておる。」そこでインディオはモンテスマの逞しい太ももに傷をつけた。その人物は言った。「見ろ、何も感じてないだろう。すっかり酩酊していて、火を当てられても気づかないのだ。さあ、お前は現世に戻って、私がお前に太ももを傷つけるように命じたということを、モンテスマに伝えるのだ。そして今やっているようなことはやめるように言うのだ。奴の世は終わりを迎えているのだから³。奴はそれを自ら求め、願い望むものを得たのだから。分かったか。」すると哀れなインディオは言った。「いとも聡明なる御方よ、あなたは私を、かくも深遠なる神秘と奇跡に立ち会わせてくださいました。私はこのようなことに値する者ではありませんが、行って、私にお命じになったことを王に告げましょう。」すると鷲がインディオをつかみ、彼が畑を耕していた元の場所へと連れて行った。鷲は、手に花と香炉を持ったままのインディオに言った。「よいか、私がお前に言ったことを、いや、お前が会った王がお前に言ったことを、忘れるな。これからまっすぐメシコに行き、モンテスマにこの

² 原注 238 5. 五つ目の驚くべき予兆。

³ 原注 239 人差し指を伸ばした手。

ことを話すのだ。」インディオは言った。「私はまっすぐあちらに向かいます。」インディオは、花と、火の消えた香炉を携えて、大急ぎで道を歩いていった。そして誰に声をかけることもなく堂々と〔王宮に〕入っていき、〔モンテスマ王に〕言った。「偉大かつ強壮なる王よ、敬愛されし息子よ孫よ、私の身に起こったことをしかとお聞きください。私はテスクコ〔テスココ〕のコアテペク⁴に住む者です。私が畑を耕しておりましたところ、突然、一羽の鷲が私の頭をつかみ、山上へと私を連れて行き、人には想像も出来ないような荘厳な宮殿へと導いたのです。そこには、一人の威厳ある王がおりました。私はとても恐れ入って彼に挨拶をし、こう言いました。『いとも高貴にして聡明な王よ、お目にかかれて光栄です。』すると彼は私に言いました。『ここに来い、マセワル〔平民〕よ。見よ、そこにモンテスマが酔っぱらってひっくり返っているだろう。奴は今、メシコではなく、ここにいるのだ。その花と香炉を手を取れ。奴の太ももに傷をつけよ。何も感じないはずだ。奴はすっかり正気を失い、心身は酩酊しておる。それに気付かないだろうから。』彼はさらに言いました。『私が言ったことが分からぬのか。その香炉の火で、奴の太ももを傷つけるのだ。』私がそれをできずにいると、彼は『マセワルよ、お前は私の言うことが聞けぬのか』と言いました。それで私は、思い切って香炉の火を太ももに押し当てたのです。すると彼は私に言いました。『どうだ、奴が酩酊して何も感じてないのが分かるであろう。さあ、行け。ふたたび鷲に運ばれて、まっすぐにメシコへ、モンテスマのもとへ向かえ。そしてお前に託した伝言を、奴に告げるのだ。』これを見てください、私の言っていることが本当であることを示す香炉を持ってきました。」するとモンテスマはペトラカルカトルを呼んで言った。「この酔っ払いを連れて行って、死ぬほど石を投げつけよ。死ぬまで牢の中に入れておけ。」インディオが牢に入れられるとすぐに、モンテスマはペトラカルカトルを呼んで言った。「聞いてくれ。夜半過ぎに、私の太ももが火で焼かれたかのように痛み出して、今も痛さが続いている。この知らせを持ってきたあの不屈き者は、何かの魔術師か、あるいは使者かもしれぬ。あれが誰かの使いであろうと、あちらで死なせてしまえ。」そのときから、モンテスマは王の間へは出なくなった。そして太ももの痛みを治すために、自分が生まれ育った場所であるアティクパク⁵に行った。そして重臣たちを呼んで、言った。「私のために薬を探してくれ。太ももの痛さで死にそうだ。火で焼かれ

⁴ 現在のメキシコ州チコロアパン。

⁵ テノチティトランの地区名。

ているみたいだ。」そこで重臣たちはある木の根を持ち寄り、モンテスマの妻たちが治療を施すと、4日後に傷が治った。こうしてモンテスマは王宮に戻ったが、石像から告げられたこと⁶は彼の心を悩ませ続けた。そしてある日、矮人やせむしたち、シヨロメ〔シヨロたち〕、娼婦、召使たちを呼んで、こう言った。「よいか、私たちが行くべきところが分かったぞ。お前たちは皆、私とともに行くのだ。それはシンカルコ⁷だ。トゥーラに長くとどまり、それから私たちをここへと導いたウェマク⁸と呼ばれる御方のもとで私たちは暮らすのだ。あちらに行けば、決して私たちは死ぬことはなく、永遠に生きることができる。そこにはこの世の様々な食べ物と飲み物、あらゆる種類の花と果樹がある。あちらに住む者たちはこの世でもっとも幸福な者たちであり、彼らの王であるウェマクはこの世で最も満ち足りた者である。そこへ私たちは向かい、彼とともに暮らすのだ。」せむしたちは〔このモンテスマが語った〕世界のことを喜び、偉大なる神ウィツィロポチトリが大いなる心と喜びをもって自分たちをシンカルコ——あるいは地獄と言うべきか——に連れていってくれることを祈った。モンテスマは最も優れた魔術師たちを探し出して王宮に参内させた。魔術師たちはモンテスマに言った。「我らが王よ、何を我らにお望みですか。」モンテスマは答えた。「お前たちは私が遣わす使者となるのだ。そして、よいか、贈物を携えて行くのだ。」モンテスマは重臣たちを呼んで、大量の白い酒⁹を持ってこさせ、酔いしれるまで彼らと飲んだ。それから4人の捕虜を偶像ウィツィロポチトリの生贄に捧げたあと、その皮を剥ぐように命じた。彼らの皮はとても貴重なものだった。それからモンテスマは魔術師たちに言った。「シンカルコと呼ばれる場所に向かい、私に代わって、ウェマク王の手に口づけをしてくるように。」

【訳：岩崎賢 2024/07/06】

⁶ 前章にあった、新たなテマラカトル〔巨大な円盤状の石彫〕を作るためにチャルコから石を運んでいたら、「もうお前の世が終るのに何を無駄なことをしているのだ」と、石がしゃべった出来事を指しているものを思われる。

⁷ 原注 240 人差し指を伸ばした手。cintli calli co トウモロコシの家の地。

⁸ 原注 241 目印。

⁹ プルケーのことか。